

『万葉集』における感覚表現「寒し」の考察

蔡欣吟 / Tsai, Hsin Yin

淡江大學日本語文學系助理教授

Department of Japanese, Tamkang University

【摘要】

本論文為深入探究日語中溫度感覺形容詞中類似表現的異同，進行系列研究之一環。透過調查在日本最古和歌集『萬葉集』中，低溫形容詞‘SAMUSHI’(寒)一詞的使用狀況並進行分析後，得出以下結論：在上代和歌中，‘SAMUSHI’一詞可用於形容另一低溫形容詞‘TSUMETASHI’(冷)的修飾對象；『萬葉集』中，可見‘SAMUSHI’(寒)修飾鴨鳴、雁鳴，即為可用於修飾「聲音」，推測為受中國古詩影響；‘SAMUSHI’(寒)在上代的副詞用法與現代語相異，或受文體的影響。

【關鍵詞】

低溫感覺形容詞 萬葉集 和歌 ‘SAMUSHI’

【Abstract】

This paper focused on the use of sensation adjective ‘SAMUSHI’ through the analysis of the oldest existing collection of Japanese poetry *Man’yōshū*. The attempt is to illustrate the trend of use of ‘SAMUSHI’ in this material. Via the research of the aforementioned material, the next three points have become more clear. Firstly, there are two main sensation words to describe coldness, one is ‘SAMUSHI’, the other one is ‘TSUMETASHI’ in modern Japanese. However, ‘SAMUSHI’ covered most meanings of coldness till Early Middle Age. Secondly, ‘SAMUSHI’ can be used to describe the sound of creatures. This usage could be considered to be passed along from China. Lastly, it is clear that the adverbial usage of ‘SAMUSHI’ is different from modern Japanese from this study. It could be related to writing style.

【Keywords】

Sensation adjective, *Man'yōshū*, Japanese poetry, 'SAMUSHI'

1 はじめに

現代語における感覚表現「寒い」と「冷たい」に関して、服部四郎(1964)をはじめ、先行研究ではさまざまな分類や規定が行われている。一方、2語の推移に関しては、山口仲美(1982)では、それぞれの初出を確認した上、ほかの感覚・感情語彙を含めて通時的に調査し、総合的に論じられている。蔡(2016)は、低温に関する感覚の形容詞の細かい分化の傾向を見出すため、「寒し」と「冷たし」は上代から近世においてどのような語彙を形容しているのかに注目し、連体形に限定して調査を行った。その際、「寒き」が「音」を形容する用例が見られる。このような表現は先行研究において、文学的比喩表現や共感覚的表現の観点から論じられているが、語としての性質や特徴について検討する必要があると考える。また、山口(1982)では、感覚語彙は意味が変わりにくいと述べているが、意味の派生がどのように関わっているのかについては触れていない。「寒し」と「冷たし」の変遷を探るには、これらの表現の語彙としての本質の探究は避けて通れない。よって、本稿では「比喩的表現」が多用され则认为られる和歌を調査する。和歌という資料の特殊性を認めたいうえで、『万葉集』における感覚表現「寒し」の使用状況について調査・考察する。これにより、低温に関する表現の有様を明らかにすることを本稿の目的とする。

本稿は日本最古の和歌集である『万葉集』を調査資料とする。『万葉集』は全 20 巻で、4500 首余りあり、さまざまな身分の人によって詠まれたものである。テキストは 1994 年から 1996 年にかけて小学館より刊行される『新編 日本古典文学全集』6～9 を用いる。調査対象は「寒し」のすべての活用形で用いられる用例とする。なお、用例で見られる下線はすべて稿者によるものである。

2 全体の使用状況

まず、形式から使用状況を見る。『万葉集』において、「寒し」のすべての活用形による用例は 55 例ある。形態別（活用語尾と接尾語を含む）に示すと、表 1 のようになる。

表 1 形態別に示す「寒し」の用例数

語幹	活用語尾				接尾語		合計
	から	く	し	き	み	ら	
用例数	1	13	12	20	8	1	55

- (1) 降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪養の岡の 寒か
らまくに (203)
- (2) 葦辺には 鶴がね鳴きて 湊風 寒く吹くらむ 津乎の
崎はも (352)
- (3) 宇治間山 朝風寒し 旅にして 衣貸すべき 妹もあら
なくに (75)
- (4) 流らふる つま吹く風の 寒き夜に 我が背の君は ひ
とりか寝らむ (59)
- (5) うつせみの 世は常なしと 知るものを 秋風寒み 偲
びつるかも (465)
- (6) 和たへの 衣寒らに めばたまの 髪は乱れて 国問へ
ど 国をも告らず (1800)

上述した「寒し」の全活用形以外に、低温に関する感覚の形容詞は「寒けし」の使用が見られる。2 例のみで、用例を示すことにとどめるが、「寒けし」は温度に関する表現の全体の史的変遷において、どのような位置を占めているかについて、さらに用例を収集し、調査する必要があると考える。

- (7) み吉野の 山のあらしの 寒けくに はたや 今夜も
我がひとり寝む (74)
- (8) 刈り薦の 一重を敷きて さ寝れども 君とし寝れば

寒けくもなし (2520)

また、以下の例では低温に関する表現が見られる。

- (9) 琴酒を 押垂小野ゆ 出づる水 ぬるくは出でず 寒水
 の 心もけやに 思ほゆる 音の少なき 道に逢はぬか
 も 少なきよ 道に逢はさば 色着せる 菅笠小笠 我
 がうなげる 玉の七つ緒 取り替へも 申さむものを
 少なき 道に逢はぬかも (3875)

例(9)の下線部の「寒水」は『新編 日本古典文学全集』において「さむみづ」という読みが付されている。「冷たし」がまだ登場していない上代において、「水」は「サムキ」によって形容されることが見られる。なお、蔡(2016)では、『日本書紀』と『播磨国風土記』において「水」を形容する「サムキ」の漢字表記は「冷」が用いられることがある、と述べている。

次に、この 55 例の「寒し」の低温を感じる対象が何なのかということについて、その表現・語彙を検討する。対象の語彙は、細川英雄(1986)を参考に、6つの種類に分け、具体例を示す。具体例の後に続くカッコ内の数字は使用例数である。細川(1986)では、「寒い」が季節や夜などを形容する場合、これらの表現は「時間的なもの」といっても、時間そのものを形容しているわけではなく、そうした季節・夜等を空間として捉えているのであるから、一括して「空間的なもの」としたほうが良いとしている。「風が寒い夜」に関して、感覚主の状態は「寒い」と感じるのは感覚主を囲む風によるものではあるが、その風に充満される空間を形容することも間違いではない。したがって、本稿では、例えば、「風の寒き夜」のような、「寒き」が「風」を受け、かつ「夜」にかかる用例の場合、「寒し」と感じる対象を「風」と「夜」とする。よって、以下の分類①～⑥カッコ内の合計は全用例数の 55 を上回っている。

- ① 「風」の類：
秋風(10)，風(3)，北風(2)，湊風(2)，川風(1)，浜風(1)，
朝風(1)
- ② 「一括して空間的なもの」とされる時間的な表現：
夜(10)，夕(6)，朝明(2)，ころ(2)，時(1)，暁(1)
- ③ 空間的な表現：
長谷(1)，岡(1)，山辺(1)
- ④ 具体的なものによる皮膚感覚：
衣手(3)，露霜(3)，雪(1)，沫雪(1)，衣(1)，手本(1)
- ⑤ 聴覚器官による表現：
雁が音(8)，鳴きつる雁(1)，鴨が音(1)
- ⑥ 修飾する語彙が明示されない¹(2)

①「風」の類に「寒し」と感じる表現は20例である。これらの低温を感じる対象となる語は、現代語では「冷たい」によって修飾されることがほとんどであるが、「寒い」による場合も見られる。細川(1986)では、「風が寒い」は「風」を空間として捉えた「感覚主の状態」の表現であり、「風が冷たい」は「風」を空気の流れの事物として捉えた「対象の状態」の表現である。認識の仕方の転換によって2系統の形容詞が同一の被形容語について共存することがあると述べられている。「冷たし」が登場する以前の上代では、感覚主の状態でも、対象の状態でも、すべて「寒し」によって表現されている。類似する状況は「④具体的なものによる皮膚感覚」にも見られる。④の具体例を見ると、衣手や衣は現代語の感覚ではそれらに接触して感じる低温の状態であり、「冷たい」によって修飾されるものである。「手本」が用いられる歌は、「秋立ちて幾日もあらねばこの寝ぬる朝明の風は手本寒しも」(1555)である。ここでの「手本」はどのようなものか、読み取り方によって異なることが考えられる。「朝明の風は手本寒しも」の部分を現代語に訳すと「夜明けの風は手首に冷たい」となる。ここの

¹ 「人はあらじと 誇ろへど 寒くしあれば 麻衾 引き被り 布肩衣 有りのことごと」(892)

この歌における「寒く」は周りの環境が寒いと述べているが、修飾する語彙や表現がない。ほかの類と区別するため、⑥の項を設けた。

「手首」は身体部位ではあるが、読み方によって、風に吹かれて冷たくなる袖口とも解釈し得る。④具体的なものによる皮膚感覚では露霜や雪、沫雪が形容される用例があるが、これらは「風」の類に類似し、感覚主を取り囲む環境について叙述していると考えられる。⑤の聴覚器官による表現では、全 10 例の使用が見られる。これらの用例については次節で詳しく見ることにする。以上のように、上代における「寒し」の意味用法が豊富であることが認められる。

3 「寒し」が形容する「聴覚表現」

前節で言及した「⑤聴覚器官による表現」の用例を以下に示す。例(10)～(17)は「雁が音」、(18)は「鳴きつる雁」、(19)は「鴨が音」の用例である。

(10) 今朝の朝明 雁が音寒く 聞きしなへ 野辺の浅茅そ
色付きにける (1540)

(11) 旅の憂へを 慰もる 事もありやと 筑波嶺に 登りて
見れば 尾花散る 師付の田居に 雁がねも 寒く来鳴
きぬ 新治の 鳥羽の淡海も 秋風に 白波立ちぬ
(1757)

(12) 雁がねの 寒く鳴きしゆ 水茎の 岡の葛葉は 色付き
にけり (2208)

(13) 雁がねの 寒く鳴きしゆ 春日なる 三笠の山は 色付
きにけり (2212)

(14) 我が背子は 待てど来まさず 雁が音も とよみて寒し
ぬばたまの 夜も更けにけり さ夜更くと あらしの吹
けば (3281)

(15) 秋田刈る 仮廬もいまだ 壊たねば 雁が音寒し 霜も
置きぬがに (1556)

(16) 雁が音の 寒き朝明の 露ならし 春日の山を にほは
すものは (2181)

(17) 今朝鳴きて 行きし雁が音 寒みかも この野の浅茅
色付きにける (1578)

- (18) 雲の上に 鳴きつる雁の 寒きなへ 萩の下葉は もみ
ちぬるかも (1575)
- (19) 葦の葉に 夕霧立ちて 鴨が音の 寒き夕し 汝をば偲
はむ (3570)

『万葉集』では、物理的な温感以外で使用される「寒し」以外の表現は以上の 10 例で、すべて「声」、つまり聴覚に関わるものである。雁の鳴き声を表すものがもっとも多く、9 例もある。「寒し」全体の使用において高い比率を占め、重要な表現といえよう。そのほかに、鴨の声が 1 例ある。なお、蔡(2016)の調査では、上代において連体形「寒き」で用いられる使用のうち、物理的な低温以外の意味用法は『万葉集』のみで見られる。連体形以外の活用形を調査しなければ「寒し」の全貌が見えにくい、現段階の調査結果では上代における「寒し」は「触覚」と「聴覚」を表し得ることが言えよう。

『日本国語大辞典』第二版に立項される「寒い」の意味とその初出を確認し、本稿に関連する解説を以下に示す。

(1) 温度がいちじるしく低く感じられるさま。

(イ) 物体や液体の温度が、自分の体温よりもいちじるしく低く感じられるさま。つめたい。

＊催馬楽〔7 C 後～8 C〕飛鳥井「飛鳥井に 宿りはすべし や おけ 蔭もよし 御甕(みもひ)も左牟之(サムシ) 御秣(みまくさ)もよし」

ロ) 気温が不快なほどに低いさま。また、そのように感じるさま。寒気を感じるさま。

＊日本書紀〔720〕天智称制一二月(北野本訓)「高麗国は寒(サムイ)こと極(きはま)て俱(え)凍(こほれ)り」

(2) ある物事によって、いかにもひえびえと感じられるさま。

(イ) からだや心がひえるように感じられるさま。さむざむと感じられるさま。

*万葉集〔8 C 後〕一四・三五七〇「葦の葉に夕霧立ち
て鴨が音(ね)の左牟伎(サムキ)タへし汝(な)をばしの
はむ〈防人〉」

『日本国語大辞典』の解説によると、「寒し」は(1)の低温が感じられる表現より、(2)の体や心が冷えるように感じられる表現のほうが後から使用されることがわかる。また、「寒き音」は「聴覚」によって体や心が冷えるように感じるのである。「寒し」の意味用法は触覚から聴覚へ派生することが見られる。このような派生は共感覚的な表現とする論述がある。「共感覚」は心理学や認知科学で用いられることが多く、『日本国語大辞典』では、「一つの物理的刺激に対して、本来それに相応して起こるべき感覚以外に起こる感覚。たとえば、音を聞いて色を感じたりすること」とある。認知言語学の分野では、「共感覚的比喩表現」が盛んに研究されていることが見られる。日本語におけるいわゆる比喩表現を考えると、「共感覚的比喩表現」が一つの解釈の仕方を提供しているが、上代において聴覚による低温表現は『万葉集』のみに見られ、また、ほぼ「雁が音」に集中していること、すなわち、「寒し」は聴覚表現のうち、「雁が音」との連結がとりわけ強いということについて、他の視点から検討する必要があると考える。そこで、『万葉集』の資料性に着目する。『万葉集』に関する国学研究は長い時期に亘って研究され続けられており、すでに膨大な蓄積がある。この中で、中国文学から影響されることがしばしば論じられている。「寒き音」という表現も中国の影響を受けている可能性がある。奥村和美(1997)は、『万葉集』の歌の四季のうち、「雁」と「秋」に関する意識について論じられており、「雁の場合も声の寒シという点に中国詩の中で育まれた観念を通して秋の季節性が捉えられていた」とある。具体的に、隋の時代に詠まれた中国詩が挙げられている。以下に奥村(1997)を引用する。なお、その中で言及されている中国詩について、註に全文を提示する。

嵯岫草木黄 飛雁遺寒聲

(隋・胡師耽 「登終南山擬古詩」『初學記』卷五

「終南山」)²

(中略)

のような中国六朝詩の表現に拠る、この時代の新しい表現であっただろう。雁声の寒しと聞えることは、浅芽の黄葉とともに秋の賞でられるべき風物としてあった。雁声を冷え冷えとした情調を負うものとして美的に享受する、その自然への対し方に、この時代広く好まれた新しい傾向の一端が窺われる。

文学の側面からの論述は、本節で検討している「寒し」と「音」の関係と直接に関わらないが、上代日本語における「寒き音」という表現は中国詩の影響を受けたことが示唆される。

『万葉集』に見られる「寒し」による聴覚表現は現代語に定着しなかった一方で、後に登場する「冷たい」は、「寒き音」と異なる意味関係で「聴覚」の表現を表し得ていることが興味深い。一作品のみで、「寒し」による聴覚表現の全貌を観察することができない。『万葉集』を起点に、そこから遡って中国詩との接触、またその後、「冷たい」の出現によって発生する分化過程を通時的に考察する必要がある。

4 「寒し」による連用修飾表現—現代語との比較

「寒し」が連用形で用いられる用例は、例(10)～(13)で聴覚表現を修飾するもののほかに、以下のようなものも見られる。

(20) 葦辺には 鶴がね鳴きて 湊風 寒く 吹くらむ 津乎の
崎はも (352)

(21) 今よりは 秋風寒く 吹きなむを いかにかひとり 長

² 胡師耽【登終南山擬古詩】『《詩紀》雲。拾遺作李德林者非。』

結廬終南山。西北望帝京。煙霞亂鳥道。劣見長安城。宮雉互相映。雙闕雲間生。鍾鼓沸閭闔。笳管咽承明。朱閣臨槐路。紫蓋飛縱橫。望望未極已。甕牖秋風驚。崑岫草木黃。飛雁遺寒聲。墜葉積幽徑。繁露垂荒庭。甕中酒新熟。澗穀寒蟲鳴。且對一壺酒。安知世間名。寄言朝市客。同君樂太平。(○《初學記》五。文苑英華百五十九。文苑英華二百五作同終南山擬古。《詩紀》百二十七。)

き夜を寝む (462)

(22) 秋風の 寒く 吹くなへ 我がやどの 浅茅が本に こほ
ろぎ鳴くも (2158)

(23) よしゑやし 恋ひじとすれど 秋風の 寒く 吹く夜は
君をしそ思ふ (2301)

(24) 湊風 寒く 吹くらし 奈呉の江に 妻呼び交し 鶴さは
に鳴く (4018)

(25) 八田の野の 浅茅色付く 愛発山 峰の沫雪 寒く 降る
らし (2331)

(26) 秋萩の 枝もとををに 露霜置き 寒く も時は なりに
けるかも (2170)

(27) 雪降る夜は すべもなく 寒く しあれば 堅塩を 取り
つづしろひ 糟湯酒 うちすすろひて しはぶかひ 鼻
びしびしに 然とあらぬ ひげ搔き撫でて 我をおきて
人はあらじと 誇ろへど 寒く しあれば 麻衾 引き被
り 布肩衣 有りのことごと (892)

(26)は「なる」に掛けて変化を表す。(27)の2例は助詞「し」をはさみ、後ろの「ある」に掛け、状態を表すものであるが、動詞「ある」はほとんど実義が付与されておらず、形容詞の働きが著しいと言えよう。「寒くなる」「寒くある」のような表現は現代語でも見られる。(20)～(25)の「風が寒く吹く」「雪が寒く降る」はどのような表現でありうるか、まずは先行研究を援用して説明を試みる。

高羽四郎(1960)では俳諧を対象に、形容詞の連用形を接続の関係と後接する動詞の種類によって分類し、論じられている。この中で特に注目したいのは、動詞が後接する場合、もちろん動詞は主語に結びついているが、形容詞が主語に近寄るか、動詞に近寄るか、ということである。例えば、「山門の・赤う・見えたる」では「赤う」は主語「山門」に、「下駄の音・遠う・聞ゆる」では「遠う」は動詞「聞ゆ」に近寄っていると述べられている。この点から見れば、「風・寒く・吹く」においては、「寒く」は名詞「風」

に近寄っており、「風」を形容する意味合いが強いと考える。一方、現代語の副詞的表現については、仁田(2002)は体系的、包括的に論じられている。「雨に洗われて白く光ったその根」という文では、「白く」は「光る」という動きの質・様を差し出しているとともに、「その根」が「白い」状態である、というふうに主体の状態をも表している、としている。この観点から「風が寒く吹く」を見れば、「寒い(く)」は主体の「風」の状態になり、また、「吹く」という動作を差し出す、と解釈することが可能であろう。つまり、先行研究で述べられている説明による生起過程に基づけば、「風が寒く吹く」は現代語でも用いられ得る表現である。しかし、実際に現代語における表現を調査すると、『万葉集』で見られるほどの使用がない。以下に現代語における使用を説明する。

現代語では「寒い」は連用形としてどのように用いられるのか、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下、BCCWJとする)を利用し、調査する³。BCCWJは収録対象の刊行年代が最大30年間(1976～2005)で、ジャンルは書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などにまたがって1億430万語のデータを格納している。この膨大なデータベースを利用すれば、現代語の諸相はある程度把握できよう。検索システムは「中納言」を使う。「寒く」をキーに設定し、それと共起する動詞を調べる。以下、検索結果を出現頻度順に示し、カッコ内は出現回数である。

5例以上：なる(498)、感じる(33)、ある(8)、する(5)

5例以下：見下ろす(2)、思える(1)、よぎる(1)、かじかむ(1)

現代語において「寒い」が連用形で修飾する動詞は、「なる」がもっとも多く、2番目に頻度の高い「感じる」を大幅に上回る。「寒い(寒し)」が「なる」を修飾する例は、『万葉集』でも見られ

³ 国立国語研究所(2011)、検索システム「中納言」
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>, 検索日：2016年6月28日

る。2 位の「感じる」によって、感覚語彙としての「寒い」は動作主の認識によるものであることを明示的に表現することができる。「感じる」に続いて出現頻度が高いのは、「ある」「する」である。その他は 5 例以下の使用である。BCCWJ では、「寒く」と共起する「吹く」の使用例が見当たらない⁴。さらに、Google 検索を行った⁵結果、「風が寒く吹く」は使用例が少なく、以下のようである。

(28) 歌詞 「あなたへの思い」⁶

風が寒く吹く夜は 空を仰いであなたを思う
 逢えない事に耐えられず
 一人で寝れない 夜に泣く
 いつもいつも 思ってる
 いつもいつも 待っている

(29) 短歌

台風が去って翌朝晴れの空
 名残の風が寒く吹くなり

(30) 篠笛の曲名

「秋風の寒く吹く夜は」

(31) 高校の WEB 掲示板

心配していた雪は大丈夫そうですが、北風が寒く吹くという予報です。防寒対策も十分していきましょう。

歌詞や短歌、曲名に使用されていることが見られる。現代語では韻文や歌詞を除き、書き言葉において使用場面がほとんど見られないことがわかった。『万葉集』に見られる聴覚による「雁がねの寒く鳴きし」や触覚による「秋風の寒く吹く」「沫雪寒く降る」は、それぞれ「雁の鳴き声を聞いて寒く感じる」、「風が吹い

⁴ 「風」をキーに、「後方 2 語」に語彙素「寒い」と設定して検索した結果、7 例該当する。「寒い風」は 17 例該当する。

また、「冷たく」をキーに、「前方 2 語」に「風」、「後方 1 語」に「吹く」と設定して検索した結果、1 例該当する。

⁵ 検索日：2016 年 7 月 1 日

⁶ 作詞：神田希空 <http://lyrics.mat.ac/lyrics/view/101522>

て寒く感じる」「雪が降って寒く感じる」と意味するのであろう。しかし、このような用法は現代語においては用例が極めて少ない。本稿は『万葉集』で用いられる「寒し」について考察することを目的とするため、現代語における意味用法との差異を示すにとどめるが、この差異が生じた過程については、資料のジャンルによるのか、また、文体による使用差があるといった可能性はある。さらに調査する必要がある。

5 おわりに

本稿は、感覚表現「寒し」の史的変遷を探る一環として、『万葉集』における使用にどのような特徴があるのか、全ての活用形を調査し、考察した。その結果、以下の三点が明らかになった。

- ① 「冷たし」がまだ登場していない上代の和歌では、「寒し」が現代語の「冷たい」の意味もカバーしている。
- ② 「寒し」が音を修飾する用例があり、聴覚の形容語彙への派生が見られ、中国詩による影響かと考えられる。
- ③ 「寒し」が動詞を修飾し、副詞的に用いられる用例が見られるが、「風が寒く吹く」のような使用は現代語において、文体による使用差があることが考えられる。

感覚表現「寒し」と「冷たし」の変化過程や現代語との相違について、さらに解明すべき点が多く残されている。これらは、今後の課題とする。

付記

本稿は 2016 年 11 月 19～20 日、香港で行われた第 11 回国際日本語教育及び日本研究シンポジウム「日本語教育と日本研究におけるイノベーション及び社会的インパクト」にて発表した内容に加筆修正を行ったものである。

参考文献

- 国広哲弥(1967)『構造的意味論』三省堂
- 蔡 欣吟(2016)「感觉表現「寒し」と「冷たし」の通時的考察—連体形を中心に—」『黄憲堂教授記念論文集 日本語の様々な姿を考える』致良出版社(予定)
- 高羽四郎(1960)「形容詞連用形の用法」『国語学』第 40 輯
- 仁田義雄(2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 細川英雄(1986)「風は寒いか冷たいか—温度形容詞とその用法について」『国語学研究と資料』第 10 号
- 森田良行(1979)『基礎日本語 1』角川書店
- 山口仲美(1982)「感觉・感情語彙の歴史」『講座日本語学 4 語彙史』明治書院
- 渡辺 実(1970)「語彙教育の体系と方法」『講座正しい日本語 4 語彙編』明治書院